

1 学校関係者による評価

領域	学校関係者による評価と今後の課題
学校運営	<ul style="list-style-type: none"> ・いじめ防止対策について、委員会や研修会、生徒に対する周知の仕方など、現場における実効性のある取組を貴校として進めようとしていることが確認できました。 ・業務の効率化等による働き方改革の推進については、スクール・サポート・スタッフの配置の有効性が確認できました。今後、システムの導入も予定されているとのことで運営の在り方や分担の見直しも含め、引き続き検討されることを期待しております。 ・4学部が設置されている支援学校としての特色が打ち出せるような取組がさらにされることを期待しております。 ・「いじめ防止対策委員会」を年13回、「いじめアンケート」を年2回も実施しており、いじめに対する学校の真摯な取り組み、早期把握と早期対応を実施していることについて特に高く評価します。児童に対するアンケート結果のうち、(4)、(5)、(6)で「いいえ」と回答した児童が同じ28%であり、特定の児童に偏りがあるとも受け取れるが、個別対応もしっかり実施いただいているとのことで次年度(次回)は「いいえ」の割合がさがることにも期待できる。 <p>教育大付属、4学部設置という他の公立支援学校と異なる環境を生かした研究も実施しており評価できます。その研究成果を本学運営への反映、他校への水平展開を期待します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・当該年度の重点目標が設定されたこと、その達成度を検証していること、教員・保護者・生徒・評議員に対するアンケート等を実施して生の声を活かそうと取り組まれていることなど、様々な改革に取り組まれていると感じました。 ・外部環境が厳しいなか、真摯な取り組みがなされていることに敬意を表します。 ・重要課題を挙げるだけでなく、各観点から実質的に改善が図られていると思います。 ・いじめ防止対策の充実は、児童生徒へのアンケート実施や全教員参加の研修会が行われ、学校全体でいじめ対策に取り組んでいることが評価できる。業務の効率化については、教員会のオンライン化やフルクラウド統合型校務支援システムの導入など、時代に即した対策が取られているといえる。 ・性暴力・ハラスメント・体罰は顕在化しにくいいため、引き続き教職員への指導が求められる。4学部の特徴を生かす教育については、中高連携から具体的な教育活動の成果を見せてほしい。研究協議会は学大附属校に期待される責務の一つであり、日々の教育実践の成果を公開・共有化してほしい。教員志望者減少の中、教育実習も附属校の重要な責務であり、学生たちに教員という将来の夢を抱かせるよう教員各位の真摯な対応を期待する。
教育活動	<ul style="list-style-type: none"> ・各種行事、研究協議会を実施しつつ、個々の生徒に合わせた支援に取り組まれていたものと考えます。 <p>昨今の労働時間管理の厳格化もあり、指導体制(マンパワー)と教育活動の充実も工夫して対応しており評価できます。教員へのアンケート結果からも教員間のコミュニケーションもしっかり取れ、助け合う風土ができていますと判断します。</p> <p>一方、疲労感、働き過ぎ感を感じている教員も多いので、業務改革については地道に継続いただければと思います。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校現場が全体として人材不足であり、人の教育に関わる仕事である以上その人材確保は容易ではない状況において、人員配置の工夫やICTツールの活用などに努めておられると感じました。以前の体制では、教員の方々からの負担感に対して、評議員会議の場で「個人の感じ方の問題である」と明言されていたことを考えると、マネジメントとして取り組まれるようになったこと自体が大きな改善点だと思います。 ・幼・小・中・高の連続性を活かした教育活動の展開が楽しみです。児童生徒も保護者も教員も連続性を意識できるようになると、学習活動や卒後の就労に向けた取り組みが

	<p>より効果的になると期待されます。他校との交流及び共同学習もとても素晴らしいと思います。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・幼稚部では、少子化で入学希望者の減少も予想される中、学校公開や親子体験入学に留まらず地域への働きかけが見られ努力が伺える。居住地の保育園等との並行通園については、経験者として前向きな対応をお願いする。小学部の交流授業は、インクリーシブ教育の観点から相手校の児童にとっても重要であることに留意いただきたい。人手不足は教育現場に限らないが、小中高とも多くの非常勤に支えられている。役割分担、情報の共有で協力して業務にあたってほしい。コロナ禍を考えれば、校外学習や修学旅行が通常に実施されていることは喜ばしい。
<p>研究活動</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ ICTを活用した支援の試行等もされるなど、知的障害教育における探究的な学びの在り方について積極的に研究とその発信に取組まれていたと思われます。研究協議会の来場者数や参加者アンケート結果からもその成果に対する期待の高さが窺えます。 ・ 研究協議会については、近年では最多の参加者で、アンケートでも、極めて高評価を得ており、本学の研究への期待度が高いことを改めて認識し、本学の研究活動は高く評価できます。一方、参加者多数により、本学保護者の参加・聴講ができないのは、保護者に対するアピールの点では残念です。後日、保護者に対しビデオを活用しても良いので報告会的なものも出来れば良いのではと感じました。 ・ 研究協議会への参加者数や、アンケートでの高評価など、充実した取り組みが実践されていることがうかがわれました。 <p>日常業務としての教育活動の負担があるなかご負担ではありますが、専門性の高いセンター的な教育機関として発信していただければと存じます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 研究活動を通して、若手や中堅の教員が専門性をより高められるようにする意図が既にあるのかと思いますが、その視点を、大学教員を含めて全体で改めて共有できるとさらに効果が得やすくなるのではないかと思います。 ・ 「知的障害教育における探究的な学びの創造」をテーマに1年次の研究と発表を行った。発達段階に応じて「探究」の姿を再定義し、「探求」から「探究」へ発展する縦断的枠組みを設計・検討するという、学大附属校ならではの高度な研究活動であると高く評価できる。全国からの参加者が200名近くに及び、自らの教育現場でも生かせるといった肯定的な評価を、極めて多数の参加者から得ていることは特筆に値する。今年度の成果と課題をよく分析し、来年度の2次研究につなげていただきたい。
<p>学生の教育・支援活動</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 人員体制の厳しさ等もありながら体験学生の受け入れ再開をする等、学生に対する教育支援に積極的に取組まれていたと考えます。 ・ 教育支援は例年どおり取り組んでおり良好と評価します。引き続き学生の教育研究のため大学と連携をとってください。 <p>また、難しいとは思いますが、学生の教育と教員の業務負担が両立できればと思います。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学生の教育により、現場の教員の質量の拡充に繋がると思われますので、引き続きご尽力いただければと存じます。 <p>今年度の教育実習では、学生たちが主体的かつ生き生きと取組んでいる様子に見えました。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ センター的機能の一環として、附属学校園の支援を行うことはとても良い取り組みだと思いました。特別支援学校の教員が附属学校園に出向くだけでなく、場合によっては、コーディネーターとして、特別支援科学講座の教員につなぐことも選択肢の一つに入れても良いかもしれません。 ・ 少子化で学生数も減っているのに、そのうち教員の志望者も減少しているといわれる。いまの若者たちには教育現場での業務が過酷と嫌われる傾向にあるようだ。そうした中で、教育実習を受け入れるなど学生の教育・研究への支援活動は、学大附属校の重要な使命である。教員一人ひとりが情熱をもって児童生徒に教える姿を見せ、実習生に的確な指導をすることで、教員志望者の増加に貢献していただきたい。特に、教育実習がきっかけとなって特別支援教育に関心をもつ学生が増えることを期待している。
<p>社会貢献</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究への協力、視察対応を多数実施しており高く評価します。 <p>特別支援学校は地域の方々のご理解・ご協力を頂くことは特に重要と考えます。今年度活動は夕涼み会が台風により中止となり残念でしたが、次年度も良好な関係の継続を期</p>

活動	<p>待します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・従前の慣行にこだわらず、今の御校と社会に必要なと思われる活動について、優先順位をつけて対応して頂くことで十分かと存じます。 ・限られた時間、人材にも関わらず、近隣の自治体や機関との連携がしっかりと図られていることは高く評価されるべき点だと思います。 ・公開講座や地域との連携、調査研究への協力、視察の受け入れ等、特別支援教育の専門校として外部から求められる多様な要望に応えている。また個々のケースの相談については、相談部に担当教員を配置し専門的知見から支援にあたっている。今後も長年の蓄積を社会貢献に生かしていただきたい。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・学校では先生方は明るく元気な印象があり、年々雰囲気は良くなっている印象がありますが、そのためには教員の良好なメンタルヘルス維持なしでは成り立ちません。教員の業務改革と並行しPTA活動の改革も進めていく必要がありますので、引き続きご協力をお願いいたします。 ・若手の人材育成が大きな課題になるのではないかと思います。研究や大学との安定したつながりの中で自身の専門性を高めていけることが附属特別支援学校の魅力の一つなのかもしれません。場合によっては、特別支援科学講座の教員が若手教員向けに、お互いに負担になりすぎない程度の20分ほどのミニレクチャーを行う複数の機会が設定されても良いかもしれません。 ・卒業生対応として、若竹会の活動に協力している。1年を通して様々な行事があるが、担当教員が休日にも出勤してその運営をサポートしている。その都度卒業生とも交流していることは、卒業生やその親にたいへん喜ばれ感謝されている。生涯支援教育という理念のもと、卒業後も一人ひとりのことを気にかける学校であってほしい。

2 評価の実施概要

1) 学校関係者評価委員会の開催 年2回(7月、2月)

- 第1回 授業参観、施設・設備の観察、
協議(学校の状況、学校経営計画、今年度の重点課題等について)
質疑、評議員からの助言・提言
- 第2回 授業参観、施設・設備の観察、
協議(学校の状況、今年度の反省等について)
質疑、評議員からの助言・提言

2) 学校関係者評価委員会の内容

- 第1回 令和7年度学校経営計画について
令和6年度保護者アンケートの結果について
令和6年度教員の働き方についてのアンケートについて
令和6年度学校関係者評価書
- 第2回 学校経営についての今年度の状況・評価、各学部の状況報告
令和7年度第1回学校評議員会協議書のまとめ
令和7年度保護者アンケートの結果について
令和7年度教員の働き方についてのアンケートについて
学校評価の記入依頼

3 学校関係者委員会委員、開催日

1) 学校関係者委員会委員(学校評議員)

- 岩永 純 (東京障害者職業センター多摩支所長)
- 山中 誠一 (東久留米市さいわい福祉センター所長)

菊地 直樹 (東京都立東久留米特別支援学校校長)
黒松 百亜 (晴海協和法律事務所 弁護士)
水田 育久 (東京学芸大学附属特別支援学校P T A会長)
堤 啓介 (東京学芸大学附属特別支援学校若竹会会長)
上松 久美子 (東久留米市教育委員会指導室参事兼指導室長事務取扱)
池田 吉史 (東京学芸大学総合教育科学系准教授)

2) 学校関係者委員会開催日

第1回 令和7年7月14日(月)

第2回 令和8年2月27日(金)